

紅葉日和です

OWCC 中川和道 20221115

紅葉(こうよう)日和だ。紅葉、黄葉、山と街の紅葉、これらを調べ直してみても楽しかった。

温暖化前、立山の紅葉は秋分の日 9 月 23 日頃だけなわを迎えものだ。何回見ても目がさめる。知り合いの女性がセーターの腕をナナカマドの赤と並べ、色調の同一さに驚きの声をあげておられたのを鮮明に思い出す。つい先日まで残雪が座っていたくぼ地を取り囲んで、ハイマツの濃い緑、つつじ系の黄色、ナナカマドの紅色、これらが縞状紅葉を形成し、深まりゆく。見事だ。

この思い出が毎年つよいので、中川の中では、紅葉は 9 月に終わる。そう洗脳されてきた。清水寺 11 月の紅葉やご近所西宮宝塚の紅葉は、余韻やら回顧という印象だった。ところが、この印象が 2022 年は少し変わった。コロナのため秋山をのがし続け、身近に目が向くようになったのだ。

不勉強にも中川はカエデとモミジの区別をちゃんとは知らなかった。モミジとは古来「変色する植物」全般を指していたのが転じて 3 種のカエデを特定する日本独自の文化発展の所産だという。植物学的にはモミジは存在せず、カエデなのだそうだ(Wikipedia「紅葉」)。若草山や尾瀬の草が黄色になるのを草紅葉(くさもみじ)と言う。漢字表記では黄葉を「もみじ」と読んだうえで赤か黄色かを明示する理由を、この年齢にして学んだ。

世界的に見れば、アメリカ西岸では夏に水不足で草が枯れて黄色になるのが通例だそうで、日本の秋の草紅葉を「おっ、カリフォルニアサマーだ」と言われて驚いた。カナダではメープル紅葉をセスナ機で紅葉狩りする人も多いという。えーい、でっかい国の民、勝手にせい！

中川が生まれた四国宇和島では、紅葉する樹木が、ふもとにはそもそも少ない。高い山にはあるので紅葉を見たこともあったにはあったが、印象が薄いまま育った。2017 年の暮れ、弟の急変で車を飛ばして、四国にも紅葉があるのに初めて気がついたありさまだ。九州生まれの仲間も同じ印象だという。中川があまりにも鮮やかな紅葉に感化されて山にのめりこみ、やがて剣・穂高の登攀に目覚めたきっかけにはこれがあったのかもしれない。スリランカから来た博士課程の大学院生が「日本で驚いたこと 20」の筆頭に「葉っぱの色が変わる」をあげた。なるほどだ。

上記の緑・橙・紅の 3 色に初雪も加わることがある。中川は 10 月はじめの剣岳などで降雪直後、これに出会った。真白な初雪の下から深紅のナナカマドやチングルマがのぞく。何だか、違和感を感じただけど・・・と小屋の方と話し込んだ。中川が「吹雪の日、雪の下の鮮やかな深紅の色が、何だか、お化け映画か幽霊映画の白黒画面で、くちびるだけが深紅で、その鮮やかさが怖いみたいな感じだった」と言うと、その方は、お客さんとここまで深い話はあんまりしないのですが、とおことわりになったうえで、「仲間の中には、死に化粧、と呼ぶ人もいます。山が見せる多数の顔のひとつです」と教えて下さり、しばし時間を共有した。世界は何もかも含んで、多様だ。その多様さに、山小屋の方々は深く接しておられるのだと感じ入った。

身近な山の紅葉は百丈岩のやまびこ茶屋の池のほとりに。何年前か前、池から登山道入口に向かう道に、それこそびっしりと、もみじの落葉のじゅうたんが敷き詰められていた。生瀬の街の通りには、ヌルデの葉が年ごとに異なる色合いで所在を宣言する。今年はちょっと淡い色だった。来年は、さて、どんな色合いになるのか、今から楽しみだ。